

P3-A-0851

頸椎後縦靱帯骨化症を呈した症例の functional activity limitation に着目した運動療法の直後効果

高岡 克宜¹⁾, 田野 聡¹⁾, 田岡 祐二¹⁾, 鶯 春夫²⁾

¹⁾橋本病院 リハビリテーション部, ²⁾徳島文理大学 保健福祉学部 理学療学科

key words 頸椎後縦靱帯骨化症・functional activity limitation・肩甲上腕関節

【目的】

頸椎後縦靱帯骨化症 (OPLL) により軽度の不全麻痺を呈した症例の functional activity limitation (FAL) に着目した運動療法の直後効果について報告する。

【症例提示】

60 代男性。診断名は C4-6OPLL (保存療法)。職業は理容師。FAL は散髪中に右手でくしを使用して髪の毛を取りにくい。現病歴は数年前より力が出にくい等の症状が出現し薬物療法等を行っていたが徐々に力を発揮しにくくなったため、平成 26 年 3 月より週 1 回の外来運動器リハ開始となる。ADL は自立、下肢運動障害や膀胱直腸障害は認めない。筋力は握力右 26.0kg、左 35.1kg、MMT にて右肩関節外旋、前腕回外が 3 レベルと著明に低下していた。ROM-T、感覚検査、深部腱反射ともにほぼ正常であったが、前腕回内筋群の筋緊張が軽度亢進していた。FAL に対する outcome measure は、右上肢にて髪の毛をくしで取る動作を疑似的に再現するため、右肩関節を 3rd position で保持し、出来るだけ早く正確に 30 秒間前腕回内外を行わせその回数を治療前後に計測した。なお、その動作はビデオ撮影し、肘頭とベッド間距離を測定した他、左右肩甲帯の高さや最大回内外時の動作の正確さを評価した。動作の分析から治療対象を肩甲上腕関節の安定化と仮説を立て、肩関節外旋筋群に焦点を当てた運動療法を 20 分間行った。

【経過と考察】

前腕回内外の回数は治療前 21 回→治療後 18 回であり動作速度は遅くなったが、肘頭とベッド間距離は治療前 14cm→治療後 28 cm、治療前に起こっていた過剰な肩甲帯の挙上や前腕回内外の正確さは改善した。上肢を空間で使用する際の安定化機構は骨構造体よりも軟部組織に依存することが多く、腱板構成筋群を中心とした運動療法が必要であると考え。今回、OPLL を呈した症例の FAL に着目した運動療法の直後効果を検討した結果、肩関節外旋筋群に焦点を当てた 20 分間の運動療法は効果的な側面があることが示唆された。